原爆忌

〝肌脱ぎつお母さん熱いと言い遺す〟

宮浦支部　高椋龍生

昭和二〇年八月六日午前八時一五分　広島原爆投下
昭和二〇年八月九日午前一一時一七分　長崎原爆投下
あの日から二一年、その日から戦争を憎み、原爆を呪い、アメリカを怨んでひとすじに平和をねがい、そのことを全世界の全人類に訴えつづけてきたが、しかし、世界の動向はこれに逆行してひたすら戦争への道をすすみ、被爆者をつつむ全国民のささやかな平和へのねがいと祈りもじゅうりんされドス黒い戦争の渦中へ巻き込まれようとしている。

あれから21年…全国民の平和への願いをふみにじつて、再び戦争への暗黒の道を歩いている。

合理化は人間から心を奪い、命までむしりとり、それでもあきたらず戦争までひき起こしているのである。

ここに原爆忌二一周年を迎うるにあたり、句集「広島」から当時のすさまじかった原爆の怒号と阿鼻叫喚の地獄の惨の中からほとばしり出た、怒りと悲しみと悶えと苦しみとに綴られた珠玉の絶句のかずかずを伝え、あえなくも戦争犠牲として昇華したる者と、その被爆者をしのびつつ、はらわたにしみる、その一句一句をふかく味あいながら、被爆者の尊いいけにえを無にすることなく平和への一つ一つの礎石とするよう、われわれもその礎石となるようわれわれのもてる真心と力を出しあい、誓い合いたいものである。

○奪われし命二十万呪いの火
○炎天の死屍の中より水呼べり
○炎天の老母ひきずる帯かぞうふか
○原爆に焼けし乳房を焼けし子に
○飛び出せし目にギラギラと蠅の心境に似たものを感ずる。

「殺さないで下さい」の大衆の声が、現実の社会に起きている現象や、政策に対しても、大衆のさけび声として、怒りとして、行動として発せられることを私は深く念ずるものである。

CO患者の補償打切り、特別立法制定の問題などは、正に「殺さないで下さい」さけびに価する、人間愛の基本問題だと思うが。これから起そうとする、私たちの精力をつくしての行動の支柱のためにも。

「お花はん」の心温い善意と、行動を、想像の中だけでなく、生きる生活の中で表現してもらいたいと祈るのは悲願にも似た欲望であろうか。

あそぶ
○からす来てむくろに頭なかりけり
○人ゆくゆえ行かねばならぬ皮ひきずり
○ひぐらしやあわれくそまる力なし
○じゃがいもの如き皮たれ被爆者寒がる

これら一連のどの句たりとも凄絶、悲壮、悲惨で目をそむけずにはおれない。

○荒縄に妻を背負いて飢うる命
○狂ひたし死にたし夏日赤く照る
○しゃがめないままに十年原爆忌

生き死にの境にありても、わが命をいとしみつづけては平和を呼び、人間最高の苦悩に呻吟しつつも勇敢に多難な運命を切り拓かんと、わずかにきざす展望にひとすじの生きがいを思い出すときの被爆者。

○子を背ナのエートマケ原爆未亡人
○灰降れば死の灰に結びつけ小さく生きる
○原爆忌人類はきのこ雲へ消えていくか
○広島に生きてつまずきては汗す

死の灰が降れば、死の灰におびえ、生活のくらい影におびやかされて生きる被爆者。

○月見草宿命のケロイド咲かせている

川原にひらく可憐な月見草の花を見てさえ原爆と結びつけて生きる不運の被爆者。

○木の芽雨明るきものを広島に
○折鶴が羽ばたくのです空気は汚染さないで下さい

ときにかざす死のかげの底からつねに立ちあがろうと万身の力を引き絞り、力つきては神に祈りをささげる被爆者。

日本の空
沖縄の空
ベトナムの空に
暗い影は深くたれこめ
日本に原爆を落した、その手で
莫大な戦費を貢ぎ
ベトナム人を、無差別に
虐殺する、戦争屋アメリカ！
口で平和をよそう、戦争屋の手と足で
西も　東も　地球のどこも　ともふみにじられ
戦争の生傷の絶ゆるときがない
「地球にみどりを」
「戦争は止めてくれ」
「原爆はおれたちだけで沢山だ」
「いかなる国の核実験も即刻止めてくれ」
「労仂者よ、平和のために団結せよ」
被爆者たちは
口をそろえて
そう　呼ぶ。

（昭和三〇年発行、句集「広島」より句をひろう）

「抵抗日記」⑭

お花はん

港務　柿坂　敏

現在放送中のテレビ番組で、一番聴視率の高い番組は「お花はん」という連続ドラマだそうだ。

わが家でもご多分にもれず、妻や娘たちの間で「お花はん」は人気者になっている

八時一五分という、ドラマのはじまる時間は、娘には登校前のあわただしい時間だが、カバン片手にそわそわ。妻も手をふきふき、まるで幸福の配給でも受けるかのように、いそいそとテレビの前に座りこむ有様。このような光景はいずれの家庭でもみられる光景であろう。

なる程「お花はん」を見てみると、大衆をひきつける要素と面白さをもっている。とくに女性にとっては「お花はん」の明朗さと心温い善意、物おじしない生活態度節度のあるお茶目と賢い性格がおりなす日々の生活の中でのエピソードは、新婚というムードにつつまれて、現実を忘れさすのであろう。

面白いことには「お花はん」と程遠い性格と年令の人たち程、このドラマに拍手をおくっているがせめて想像の中だけでも「お花はん」と同化していこうとする人間の悲しい習性かも知れぬ。

娘の話によれば、高橋幸治のふんする、夫のヒゲの中尉さんは不慮の死をとげる筋書になっているそうだが、NHKには「ヒゲの中尉さんを殺さないで下さい」のファンの投書が殺到しているそうだ

また同じようなことは昨年放送ドラマ「大閤記」の織田信長が、本能寺で殺される前にもあったそうだが、気にいったとなれば名作の筋書もへったくれもない、歴史上の事実さえ否定しようとする大衆の心理とは一体なんであろうか。単なるセンチメンタルだけとは片づけられぬものがありそうだ。少し意地の悪い観察をすれば、想像の中での、あるいは空想の上での正義感や、人間愛には、利害や、犠牲が伴なわないという、安心感からくるもので、人間の最も小利巧に生きる知恵としてのエゴかも知れぬ。あたかもそれは、念仏をとなえつつ嫁いじめをする婆さんの心理に似たものを感ずる。

「殺さないで下さい」の大衆の声が、現実の社会に起きている現象や、政策に対しても、大衆のさけび声として、怒りとして、行動として発せられることを私は深く念ずるものである。

CO患者の補償打切り、特別立法制定の問題などは、正に「殺さないで下さい」さけびに価する、人間愛の基本問題だと思うが。これから起そうとする、私たちの精力をつくしての行動の支柱のためにも。

「お花はん」の心温い善意と、行動を、想像の中だけでなく、生きる生活の中で表現してもらいたいと祈るのは悲願にも似た欲望であろうか。

安見

「貧乏閑なし」

港務新港　森田勝子

「貧乏閑なし」といわれていますが、ほんとうにそうです。「仂けど仂けど我が暮し楽にならざりじっと手を見る」こんな有名な短歌があるそうですが、私は字を書くことには小学校以来縁のない生活で毎日汗にまみれ、いつかはよくなる、暮しよい生活がくることを祈りながら、がんばってきました。

四人の子供たちが成長するにつけ、家族八人が生きていくために夫は少しでも収入の多い仕事に変ってはみましたが、なれるまでは大変でした。わずかの収入で、私も小さい子供を年とったお姑さんにあずけて仂きました。

いまはすでに亡きお姑さんとも一度として温泉にやることもできなくて、四カ月間床に寝たまま、病気とたたかいながら死んでいかれたお姑さん、そのことを思いますたびに一酸化炭素のために苦しんでいられる患者の方、それに大黒柱をとくされたご遺族のご苦労を思えば、私ども夫とともに仂き得ることを祈らずにはいられません。

六月十九日「産炭地住民の生活と権利を守る」二千名の力強い大集会が開かれました。中でも「中毒特別立法制定を私たちの力」でたたかい取る決議は、私たちに大きな勇気を与えてくれました。私も主婦会の役員。労仂者として生活の安定のために努力して行きたいと思います。そしてCO特別立法制定のたたかいに対するご協力を、心からお願い致します。

会員の皆さんのご協力なくては何でともなりたち得ないと存じます。私に一言書くようすすめられましたが、ただただ思うことのみ多くして、いざ書くことになると皆さんに読んでいただける文字すら知らぬほどです。しかしこれからは、皆さんの協力に感謝して勉強して行きたいと思います。

× ×

奥様メモ

プラスチック容器

プラスチック容器はテレピン系の油に弱く、食器の表面に細かいひびがはいったり、色がぬけたり、二、三年もたつと、もろくなってきます。とくに日光にあてておくと、早くいたみます。このテレピン系の油は、レモン、ミカン、ショウガ、シソの葉、ハッカなどに含まれています。ですから、プラスチックの容器には、こうしたものは入れないで、砂糖や塩入れに使うと、よいわけです。

牛乳で下痢する人

牛乳は、栄養的にはよい飲みものです。しかし、体質によって牛乳を飲むと、すぐ下痢するような人があります。こういう体質の人は、重曹を少し加えて飲むと、よいようです。

『石蕗の花が咲きました』発刊にあたつて

高椋竜生

この詩文集は、過去に、俳句雑誌、「まなぶ」「みいけ」「炭労」「新情報」「平和と民主主義」などの機関紙に発表してきたものを一応整理し、まとめたもので、一つには私の人生記録であり「みいけ」のたたかいの記録でもある。

そのとき、そのおりにふれ七情（喜怒愛楽哀悪愁）のおもむくまま、見たまま感じたままを私のことばでつづった詩であり、文章であり、魂の叫びでもある。

人間をおろそかにする合理化政策の中で、私の抵抗文学は開眼し、惰眠からさめた文学の心はいやが上にも燃えさかった。

差別に泣き泣き、キャップランプをたよりに坑底で書きつづった詩。

たたみをふきふきほとばしり出た一句。

たたかいの中で妻の偉大な力と愛情の深さと棒の如き信念の強さをまざまざと知らされてはひとりむちうたれ、子どもたちに励まされてはがんばりつづけ、差別にすり切れた手で書きつづけた文章。稚拙だが、力いっぱい精魂をこめ、つねに脳裏に明るい展望と労仂者の勝利を確信しながら勇気を奮い起こしては書いた。

ここに書きつづけてきたものは、私個人のことがらだけでなしに、「みいけ」のなかまのすべてがそうしたたたかいをたたかいつづけていることをも併せ理解していただきたいと思う。

この詩文集のどこを切っても真っ赤な血汐が、ほとばしり出てくる心地がする。

そのことは、この詩文集は私のいわば分身にひとしいと思うからである。

＜著者紹介＞

大正五年福岡県大牟田市に生まる。昭和五年大牟田市立高等小学校卒業。昭和八年二月三池鉱業所宮浦鉱に入社。昭和十一年頃より短文芸を始める。昭和十四年四月より昭和十八年十一月まで応召中支昭和十九年五月ヨシノ夫人と結婚、二女一男あり。五人組長三期。現在に至る。